

樺太の記憶伝承プロジェクトが及ぼした 大学生の態度変容に関する考察

牧野 竜 二*

A Study on the Attitude Change of Students Participating in the “Handing Down the Memories of Karafuto” Project

MAKINO Ryuji

The island of Sakhalin, which can be seen from the shore of Wakkanai City, was Japanese territory “Karafuto” until the end of World War II. After the war, Karafuto residents became repatriates and migrated to various parts of Japan. Wakkanai City has a history of economic development as the population increased due to the immigration of Karafuto repatriates. However, Wakkanai’s young people are not interested in Karafuto. Therefore, this paper examines the attitude changes of university students in Wakkanai City who participated in “The Project of Handing Down the Memories of Karafuto” (The Karafuto Project), which collects the testimonies of Karafuto repatriates for a documentary film.

First, it observed changes in the remarks and actions of university students who participated in the project’s early work. Next, it referred to previous research and determined that there was a notable attitude change. Then, as a hypothesis, it set up a model of the attitude change process of the students. Furthermore, to verify the model, it conducted a survey of the students who participated in the 2020 and 2021 projects.

As a result, this study had two findings. The first is that many of the students who participated in the Karafuto Project changed their attitudes, as hypothesized. There was an orderly connection of changes in each layer of cognition, affect, and behavior. The second is that the content and extent of the students’ attitude changes differed depending on the student. It is inferred that the difference in the time and density of the learning task has an effect. This project has the potential to become a new and effective method of peace learning.

キーワード：態度変容, 映像制作, 平和教育, 樺太, サハリン, 戦争

Key Words : Attitude Change, Video Production, Peaceful Education, Karafuto, Sahalin, War

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

1. 背景と目的

2022年2月24日、ロシアはウクライナへ侵攻した。それは本稿の執筆時（2023年2月）も続いており、欧米を中心とした国際社会から非難を浴びている。日本政府においても対ロシアへの制裁として、貨物の輸出入禁止や資産凍結などの措置をとっている。

現在、日本国内において、最もロシアと関係が深い都市は北海道稚内市であろう。日本人が通常の交通手段で到達できる最北端は稚内市の宗谷岬であり、そこから宗谷海峡を隔ててわずか43km先の対岸にはロシアサハリン島（以下、サハリン）の最南端クリリオン岬がある。その距離の近さもあり、稚内市はサハリンの各都市と活発に交流している。

終戦までサハリンの北半分はソ連（現ロシア）が、南半分は日本がそれぞれ統治していた。樺太と呼ばれた南半分には約40万人の日本人が暮らしていた。しかし、終戦直前に始まったソ連軍の侵攻により、樺太住民たちは引き揚げを余儀なくされた。多くの樺太住民が攻撃を掻い潜り命からがら海を渡って、対岸の稚内をはじめ日本各地に引き揚げた。稚内に上陸した樺太引揚者（以下、引揚者）の中には、定住した人々も多い。このような背景を持つ稚内市は、樺太との繋がりを維持するため、樺太に関係する多くの政策を実施している。

筆者は稚内市にある育英館大学において講義「映像メディア論」を受け持っており、受講した大学生（以下、受講生）とともに引揚者の証言を収集する取り組みを進めてきた。そして、それらの証言をもとにドキュメンタリー作品を制作・公開してきた。筆者はこの取り組みを「樺太の記憶伝承プロジェクト（以下、樺太PJ）」と名づけている。

樺太PJの実施に至った理由には、引揚者の多くが他界しつつあったことがある。プロジェクトを開始した時点において、すでに終戦から70年以上が経過していた。戦争の語り部の減少は日本中で問題となっているが、樺太においても同様であり、その記憶を直接聞ける機会は無くなりかけていた¹⁾。そこで、引揚者が存命のうちに取材活動を行い、その肉声や表情を含めた証言記録を映像資料として保存すべきと考えた。映像を記録することで、樺太の記憶を受け継ぐとともに、次の世代へ繋ぐ役割を果たそうとした。樺太PJではこれまで、19人の証言を記録し、7本のドキュメンタリー作品を制作・公開している。

一方、筆者が特に注目したのは樺太PJに参加した受講生の様子に変化したことである。稚内は樺太と強い関係を持っているにもかかわらず、この地域に暮らす受講生たちには樺太に興味や関心を持っている様子があまり見られなかった。ところが樺太PJによって樺太と接点を持った受講生たちは、徐々に樺太に興味や関心を持ち始め、当事者性を獲得し

ていった。受講生を間近で観察していた筆者は、彼ら彼女らに態度変容が現れたと考えている。

以上のことから、本稿の目的は、樺太の記憶を伝承する樺太PJを通して参加した受講生の態度変容を検討することとする。

2. 樺太と地域住民

2.1 樺太の変遷

樺太（現サハリン）は北海道の北に位置する南北約950km、東西約160km、面積約76,000km²の細長い島である。樺太を島と結論づけたのは、江戸時代の日本の探検家間宮林蔵である。樺太には古来アイヌやウイльта、ニブフなどの北方民族が暮らしていたが、近代になって日本やロシアからの移民が雑居し始めた。当時、未開の地であった樺太は、日本とロシアが互いに勢力を争っていた。1855年に締結された日魯通好条約では、樺太に国境を設けず両国民の混住の地とすることで一時決着したが、1875年には樺太・千島交換条約が締結され、日本は千島列島の領有権を獲得する代わりに樺太を放棄することとなった。樺太全島を領土としたロシアは、樺太を主に流刑地として使用しており、その様子はロシアの文豪チェーホフが著した「サハリン島」に記されている²⁾。1904年に勃発した日露戦争は翌年締結されたポーツマス条約によって終結し、その結果、日本は樺太の北緯50度以南、いわゆる南樺太を領土とした。当時の樺太の様子は漫画ゴールデンカムイの樺太編でわかりやすく説明されている³⁾。

日本統治後の樺太では海産物や森林、石炭など豊富な資源開発に力が注がれるようになった。その結果、北海道をはじめ日本全国から移住する者が増加し、水産加工場や製紙工場、炭鉱などの貴重な労働力となった。例えば、1920年には636人であった西海岸の恵須取の人口は、1925年にパルプ工場が建設されて以降移住者が殺到したことから、1941年には39,026人に達した（天野 2017：25）。戦時中においても、樺太住民たちは戦争の気配を感じることはあっても、空襲などを受けることはなく、平穏な日々を過ごしていたようだ⁴⁾。

しかし、その状況は終戦直前の1945年8月9日に一変する。ソ連軍が1941年に調印された日ソ中立条約を一方的に破棄した上で対日参戦したためである。11日には樺太への侵攻作戦を開始、その攻撃は無差別極まりなく罪のない多くの民間人が死亡した。侵攻は15日の玉音放送以降も続き、25日の全島制圧をもってようやく終了した。その後ソ連は崩壊したが、現在までロシアが島を実効支配している。

2.2 稚内市の樺太政策

ソ連軍の攻撃を掻い潜りながら本土へ向かった樺太住民の多くは、宗谷海峡を渡り、稚内に上陸した。そして、そのまま定住した者も多く、それは戦後の稚内の発展に大きく関係することとなる。稚内市史第二巻には次の一文がある。

「ところで、昭和二四（一九四九）年四月、稚内に市政が施行されることは後述するが、その要因の一つは、太平洋戦争の終結に伴う数多い引揚者の定住があった。引揚業務が一段落を告げた同二四年三月の調査によれば、一般引揚者一三一五世帯、五四五九人（うち樺太からの引揚者は四九六一人）に達し、これにより、稚内の人口は市政施行の最大要件である三万人を超えることになった。」（稚内市史編さん委員会1999：209）

稚内市の統計によると、戦時中の1944年2月の調査では23,817人であった人口が1948年8月の調査では31,029人と急増している⁵⁾。当時の稚内市民の数人に1人は引揚者であったことは事実であり、樺太と稚内の関係は物理的にも心理的にも近いことは明らかだ。そのため、終戦からこれまで、稚内市は樺太との繋がりを重視した政策を実行してきた。

2.2.1 樺太に関する建造物等

稚内市内には樺太ゆかりの建造物や石碑が数多く設置されている。中には市民団体が設置したものもあるが、現在は稚内市が管理を行っている。「稚内港北防波堤ドーム」は旧樺太航路の発着場である北埠頭に、1936年に建設された（図1）。樺太へと渡る人々で賑った頃を彷彿とさせる稚内のシンボルだが、引揚者が命からがら引揚船から降り立ち失意のまま見上げた建造物でもある。その近くにある「稚泊航路記念碑」は、1923年から1945年の終戦直後までの22年間運航された稚内～大泊（現・サハリン州コルサコフ）間の連絡航路の業績を称える碑である（図1）。現在でも同航路就航船の船長の親族がボランティアで修復にあたっている⁶⁾。昭和の大横綱である大鵬も引揚者として稚内に上陸している。大鵬と親交の深かった元市民が中心となり「大鵬幸喜上陸の地記念碑」を建立した。大鵬が乗船していた引揚船は稚内を離れた後でソ連軍の潜水艦の攻撃により沈没した（大鵬2001：34）。石碑の裏側には「ここ稚内で降りたことで今の自分がある。横綱になれたのも稚内が原点」と大鵬の言葉が刻まれている。

稚内市内を一望できる高台、稚内公園にも多くの石碑が設置されている。「樺太島民慰霊碑（氷雪の門）」は、帰らぬ樺太への望郷の念と亡くなった多くの人々の霊を慰めるため、1963年に建立された（図2）。終戦5日後に樺太真岡郵便局で自ら若い命を絶った9



図1 北防波堤ドームと稚泊航路記念碑



図2 樺太島民慰霊碑（氷雪の門）

人の女性を慰霊する「九人の乙女の碑」も同年に建立されている。近年建立された石碑には、2019年の全国樺太連盟による「望郷の樺太の碑」がある。碑には戦後サハリンに建立された日本人慰霊碑23基の存在が明記されている。同連盟は引揚者の高齢化に伴い、それらの管理が難しくなったと判断し、サハリンの見える稚内公園にこの碑を建立した⁷⁾。

このような建造物や石碑の設置場所は主に稚内市を代表する景勝地であり、観光シーズンには多くの人々で賑わい、それらを観察している様子が見られる。

2.2.2 樺太に関する資料館

稚内市には樺太を学習することができる資料館が2つ設置されている。

「稚内市樺太記念館」は、2018年に開館した新しい施設であり、明治時代から昭和の終戦までに樺太で起きた出来事や生活の様子に関する資料が展示されている。資料の多くは一般社団法人全国樺太連盟の解散に伴い、同連盟から寄贈されたものである。なお、樺太PJにおいて制作したドキュメンタリー作品もこの施設で展示上映している。

「稚内市北方記念館」は、1978年に開館した施設である。稚内市の郷土資料や、アイヌ民族に関する資料などが展示されている。樺太に関する資料は樺太を探検した間宮林蔵に関するもののほか、明治以降の一部の資料も展示されている。

2.2.3 国際交流

稚内市はサハリン交流などの国際交流に関する施策を実施するために国際交流課を設置している。国際交流課は2022年3月末まではサハリン課という名称を使用しており、主に稚内とサハリンの芸術・文化交流を推進する事業、定期航路を通じた旅客往来や貨物船チャーター便による取引の拡大などの経済交流を促進する事業を実施している。稚内市は1972年にサハリン州ネベリスク市、1991年に同州コルサコフ市、2001年に同州ユジノサハリンスク市と友好都市連携を調印している。さらに2002年には、サハリンとの交流を調整するために、ユジノサハリンスク市に稚内市サハリン事務所を開設した。様々な問題が雑然としている政府同士と異なり、自治体同士では積極的な交流を行っていたことがうかがえる。

3. 地域の若者と樺太

3.1 地域の若者が持つ樺太に対する興味・関心

このように稚内市は樺太との繋がりを維持するため、様々な努力を行ってきた。樺太と稚内の関係は唯一無二であり、その姿勢は大変評価できる。

しかし、地域に暮らす若者たちは、その特別な関係性を理解しているのだろうか。自らもその文脈の中にあることの自覚を、当事者性を持っているのだろうか。稚内市にある育英館大学の大学生と接している筆者はそのような問題意識を長年持っていた。そこでまず、受講生がプロジェクトに参加する前の段階で樺太の知識や樺太に対する興味・関心をどの程度持っていたのか、確認しておきたい。

3.1.1 調査方法

被験者 2020年の受講生5人(A, B, C, D, E)に2021年2月24日から3月4日までの期間において、2021年の受講生4人(F, G, H, I)に2022年3月12日から4月30日までの期間においてアンケート調査を行った。なお、受講生のうち稚内市出身は6人(A, B, C, F, G, H)、市外出身は3人(D, E, I)、いずれも10代後半から20代前半であり、社会人経験はない。また、Hのみが女性である。なお、この調査は後述する実験1及び2の調査と同じタイミングで行っている。

手続き 質問は筆者が講義内で提示し、回答は受講生にWordデータで作成させた。

内容 いずれの受講生に対しても樺太PJ参加後の調査となった。自身がプロジェクトに参加する前に持っていた「樺太の知識量」や「樺太の興味・関心の度合い」を振り返り、それらを自由記述で回答するよう求めた。

3.1.2 結果

まず、稚内市出身の受講生5人からはそれぞれ以下のような回答が得られた。

A「樺太については授業の一環として学習しました。地名や由来などを軽く知っただけで歴史や詳しいことなどはあまり詳しくは、習いませんでした。(中略)この講義で樺太を扱うまではあまり興味を持っていませんでした。理由は、家族や親戚が樺太に関係しているわけではなかったためあまり自分と関わりがなく身近な事ではなかったからです。また、自分自身歴史や地名などにあまり興味がなく自分で調べたりしなかったからです」

B「樺太について知っていたこととして、「真岡郵便電信局事件」がある。この事件は、稚内出身の学生であれば小学校の平和学習などで、扱われることがあるだろう。(中略)稚内北星学園大学には、サハリンの大学との交流事業があり、去年は実際にサハ

リンに行く交換留学制度があったので、今年は自分が行きたいと考えていた。しかし今年新型コロナウイルスの影響により、なくなってしまった。」

C「私は樺太には以前から興味があった。なぜかという、私は廃墟が好きで樺太には様々な廃墟があるからである。（中略）樺太そのものには興味があったが、ここで起きた事件といえば「九人の乙女」で有名な真岡郵便電信局事件しか知らなかった。」

F「自分としてはただ北の海を眺めた時にうっすら見えるただの島という印象しかなかったので映像として残すものなんてあるのだろうかと思っていました。」

G「講義を受けるまでサハリンが樺太だった時代に対し、全く興味がなかった。理由は遠い昔のここのように感じていたことと高校の歴史の授業内でさらっと習った程度で満足してしまっていたからである。というより覚えられなかったです。兄や両親にそのことを聞くと「それ、覚えられないのは興味ないだけじゃない？」と言われたのを覚えています。」

H「私は樺太というものは小学生の時から話は聞いていたものの、話の内容は全く理解していませんでした。樺太っていう名前では知らなかったため、氷雪の門との関係性やその場所も知りませんでした。」

次に、市外出身の受講生3人からは、以下のような回答が得られた。

D「私は中学が高校の時の歴史で登場したぐらいしか知りませんでした。樺太といえばロシア領になったぐらいしか認識がなくそれについて調べようとも思いませんでした。」

E「授業を受けるまで、私は樺太について全くと言っていいほど知識がなかった。高校までの社会の授業でソ連との歴史を習ったぐらいであり、なんとなく“戦争”に結びついていることが頭にあった程度だ。同様に、戦争に関してもあまり興味がなかった。」

I「樺太に対する知識は、終戦直後の空白期間の間に北方四島とともに当時のソ連により奪われたという話をよく聞かされており、今回の講義で、引き揚げた人たちが当時どのような心境だったのか、どのようなことが起きたのかを直接知るよい機会だと思い、本講義を受けようと私は考えた。」

3.1.3 考察

稚内出身の受講生6人の回答からは、日常生活や学校で「学習した」「習った」「聞いていた」ことによって、個人差があるものの、樺太の知識を持っていたことがわかる。一方、樺太への興味や関心を持っていることがわかるのはB、Cの2人である。A、F、G、Hの4人は興味や関心を持っていないことが明らかである。

市外出身の受講生3人について、筆者は市内出身の受講生よりも樺太の知識量が少ない

と予想していた。その回答を見ると、やはりDとEは樺太の知識は少なく、興味や関心も持っていない。一方、Iは樺太について「よく聞かされて」いたとし、具体的な興味や関心を述べている。さらに受講理由も明確である。後日、Iにその理由を聞くと、家族が樺太や北方領土に興味があり、家庭内で何度も話題に出ていたためと述べていた。

これらの回答から、受講生らがこれまで獲得してきた樺太の知識は日常生活や学校での平和学習によって大人から与えられた情報であること、そしてその知識は必ずしも興味や関心に繋がっていないことがわかる。受講生らの樺太に対する姿勢は受動的であり、学校等での学習以上の情報を自ら得ようとすることはなかった。さらに、私生活において追加情報を与えられる環境にもなかった。それらの結果、知識が興味や関心に繋がらなかったのではないだろうか。一方、Bはサハリンへの交換留学の希望、Cはもともと好んでいた廃墟という別の文脈、Iは家庭内で繰り返し話題となったことから、樺太への興味や関心を持っていたと考えられる。

水島は「学校などで、子どもたちに与えられる戦争に関する「知識」は、いつも唐突で、断片的だ。彼らのまだ乏しい人生経験や、生き抜かねばならない現実生活のいずれとも、つながりのない情報として突き付けられる。理屈や、背景事情は「理解できないだろう」とばかりに省略され、悲しさ、むごさといった感性的なメッセージばかりが押し付けられてきたとはいえないか」と、これまでの教育現場において行われてきた平和学習の形態に疑問を投げかけている（水島 2020：230）。確かに、これまでの平和学習は大人や組織の都合による一方的な知識を与えられるような形態が多かった。一方、厳密なカリキュラムが設けられている教育現場にとって、平和学習に用いる時間は限られていることから、様々な情報を削ぎ落とさなければならないことも理解できる。しかしながら、その結果、児童・生徒・学生らは戦争の一般的な知識の獲得にとどまってしまう、根本的な性質や要素を理解できず、自分には無関係のことと判断してしまうのかもしれない。

一方、田中らは「学習課題が現実場面や社会的な文脈に位置づけられた場合、学習の初期段階で興味を引きやすく、学習が進むにつれて学ぶ意味や価値を実感し、価値随伴的な興味へと深化すると考えられる」と述べている（田中・市川 2017：213）。それにたとえば、若者に学習課題である樺太を「現実場面や社会的な文脈」へ「位置づけ」できるよう手引きすることによって、彼ら彼女らはそこに何らかの価値を見出せる。それにより、樺太の知識の獲得から興味・関心の獲得へと導くことができると考えられる。

しかし、前述した通り、稚内には多くの樺太住民が移住・定住したため、住民の家族や親戚、知り合いなどが引揚者である場合が多い。稚内出身の受講生にも日常生活における引揚者との交流などから、樺太を学ぶ場面も少なくなかったはずだ。それらは樺太を現実場面や社会的な文脈に位置づける絶好の機会となる。それにもかかわらず、彼ら彼女らの

回答からは樺太をそのように捉えている様子はあまり見えない。

その原因はなんだろうか。樺太PJを進めるにつれ、筆者は引揚者たちが自らの記憶を語ることに消極的である様子を確認してきた。例えば、ある引揚者からは「みなさんも引揚者だとずっと隠していたんです。私も今だから言いますけど、みなさん隠して、実は私も引揚者なんだという人が今でもいる。そういういじめや区別をされて嫌な思いをしていたから、隠していたんだと思う」という証言を得ている⁸⁾。他にも受講生が引揚者を探していることを祖母に伝えたところ、そのとき初めて祖母が孫（受講生）に自分が引揚者だと伝えた映像も記録している⁹⁾。家族が引揚者だと知った受講生に対し、祖母は「樺太を思い出すことはない」「帰りたい、戻りたいと思うことはない」とも述べた。当時の敵であるソ連軍から逃げてきたことや故郷を捨ててきたことによる後めたさ、さらには引揚後にも差別を受けたといった消極的な理由から、樺太の経験を積極的に語らなかつた引揚者たちが多くと推察できる。したがって、これまで地域の若者たちは樺太の記憶の伝承を受ける機会が必然的に少なかった。結果、目の前に見える島を現実場面や社会的な文脈へ位置づけにくかつた。このことが地域の若者たちが樺太に興味や関心を持ちにくい要因の1つではないかと、筆者は考えている。

3.2. 「現代の若者編」における受講生の観察

以上のような問題意識を筆者が持つ中、2014年の講義の題材に樺太を取り上げることとなった。作品の内容は、樺太に興味や関心を持たない受講生自らが被写体となって作品に登場し、樺太を学び、自身も樺太に関係していることを理解する過程を描いたものである。

筆者はこの作品の制作において、活動を続ける受講生たちが徐々に変化の様子を間近で観察できた。そのため、作品内の受講生の様子や発言の変化を確認したい。

なお、この作品は樺太PJの開始前の作品である。当時はこの活動をプロジェクト化して継続するつもりはなかつた。継続することを決めたのは、作品公開後、大きな反響を得たことが影響している。

3.2.1 作品の目的（学習課題）

2014年の講義において制作する映像作品のテーマを決める際、2015年が戦後70年となる節目の年であるという理由から、受講生が樺太をテーマに選んだ。

受講生は樺太の知識がほぼない様子であった。そのため、受講生自らが作品に登場し、樺太について学習したり引揚者に話を聞くことで「自身が変化する過程を映像で表現すること」を作品の目的（学習課題）とした。なお、受講生らにはカメラの前であっても、自らを偽らず自然体で取材活動をするよう申し添えた。

3.2.2 制作の手順

制作者 作品制作は2014年の受講生4人が担当した。受講生の変化を表現するため3人が被写体となり、1人が撮影することとした。編集は被写体となった受講生のうち1人が行った。筆者は映像制作の指導、取材交渉や制作工程の管理を行った。

制作工程 制作は2014年11月から開始した。まず、11月に樺太の文献や市内の石碑、資料館を調査した。次に、12月から引揚者の証言の収集を始めた。編集は2015年1月から開始した。2015年9月にはサハリンへ渡航し、サハリンの現在の様子や引揚者取材した。2016年3月末に編集を完了し、作品を完成させた。作品は2016年5月から育英館大学（当時、稚内北星学園大学）公式YouTubeチャンネルで公開している。

取材対象者 2014年には4人の引揚者、2015年には2人の引揚者と1人の関係者の合計7人の証言をハイビジョン画質で収集・保存した。

その他特記事項 サハリン取材には渡航費などの費用負担が発生した。その費用は、稚内北星学園大学（現、育英館大学）が文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択されていたため、同事業予算から支出することとなった。なお、2016年9月18日、19日に同大学で行われた第1回COC全国シンポジウムにおいて、この取り組みを報告している。

3.2.3 作品の内容

成果物である作品のタイトルは「私たちは、【カラフト】を知らない。」である（図3）¹⁰⁾。

「樺太について思い浮かぶことは」との質問に対し、学生の「何もない」という返答から作品が始まる。受講生3人が登場し、そのうち主人公役の女子学生（以下、主人公1）が漢字で樺太と書こうとするが正しく書けない。BGM挿入、タイトル表示後、暗転する。

明転後、稚内と樺太の説明がナレーションで入る。主人公1らは、戦争の苦しみを表現しているというモニュメント「氷雪の門」の女性像の表情を見ようとする。しかし、その顔は高い位置にあり、さらに上を向いているため、地上からは見えなかった。

それぞれの家族に樺太について聞いたところ、主人公1の祖母が引揚者だったことが判明する。祖母は樺太大泊町出身であり、本土より豊かな生活をしてきたことなど、当時の樺太での生活の様子を語る。樺太に興味を持ち始めた主人公1らは「サハリンに行ってみよう」と言うが、祖母はすぐさま「(行きたいと) 漠然と思うだけじゃ駄目。よく考えないと」と返答。「氷雪の門の表情は、まだ見えませんでした」というナレーションが入る。

主人公1らは樺太の知識を深めるため資料館へ向かうが、そこで「九人の乙女」の悲劇を知る。九人の乙女とは、終戦直後に侵攻してきたソ連兵から自らの純潔を守るため青酸カリを飲み自決した樺太真岡郵便局の電話交換手のことである。主人公1らは九人の乙女の同僚であった引揚者の女性に話を聞くことにした。同僚の女性は九人の乙女との思い出やソ連軍の攻撃の様子などを鮮明に覚えていた。自らは本土へ引き揚げるために退職して



図3 「私たちは、【カラフト】を知らない。」の一場面

おり、運よく事件に遭遇しなかったと語る。主人公1は「その場にいたら、どうするか」と質問した。同僚の女性は「(青酸カリを)飲んでた。みんな一緒だから」と答えた。

主人公1らは現在の樺太を知るためにサハリンへ渡った。サハリン最大の都市であるユジノサハリンスクに向かった一行は一人の日本人男性と出会う。男性は引揚者であり、家族の墓の跡地を探すために来たという。主人公たちは男性に帯同することとした。男性は変わり果ててしまった故郷を知り悔しい気持ちを抱く。しかし、次第にその気持ちは変わり、最後には「この土地を大事に使ってくれている」とサハリン住民への感謝を口にする。

主人公1らはサハリンを去る前に、主人公1の祖母が通った女学校を探すことにした。その建物は取り壊されたというが、サハリン住民から聞き取りをし、跡地を突き止める。そこで主人公は「戦争があったからこの街がある。これからも街は変わるが、戦争を忘れないようにしたい」と最後に語り、暗転。エンドロールが入る。明転し、氷雪の門が映る。「今なら氷雪の門の表情が少しだけわかる気がする」とナレーションが入り、作品は終幕する。

3.2.4 調査と考察

(1) 方法と手続き

主人公1の作品内の行動や発言を抽出し、その変化を考察する。

(2) 結果と考察

作品冒頭、主人公1は樺太の知識がほぼ無く、樺太という字も書けない(0分15秒)。また、「樺太? 樺太ねえ……。船に乗ったらいけるよ、みたいな。近いよ、みたいな。」(2分7秒)という発言もしている。このときの主人公1にとって、樺太は対岸の島という認識でしかない。しかしながら、祖母が樺太出身であることを知り、その記憶を聞いた後は「(祖母は)結構な年じゃないですか。亡くなる前にこういう機会があったのは、(樺太と)縁があるのかなと思いました。」(7分27秒)と、自身と樺太との繋がりを意識する発言をしており、興味や関心を持ち始めていることがわかる。九人の乙女の同僚女性との会話の際には「私の年だと、今の風潮とかもあるんですけど、自決するということが考えられないんですよ。もし自分が彼女たちと一緒にいたら(自決しますか)?」(12分

40 秒) と、自身を九人の乙女に重ね合わせた質問をしている。さらにサハリンで自決現場を訪ねたときには「今でも郵便局として使われているんですね。全てがなくなった訳ではないというのが何となく嬉しいような気がします」(15 分 28 秒) という発言をしており、樺太での出来事に関して当事者性を獲得している様子がうかがえる。最後に祖母の女学校跡地を探し当てたときには「戦争があったからこのまちが今ある、という不謹慎かもしれないですけど、これから(まちも)どんどん変わっていくんだと思いますし、良い方向に行くか、悪い方向に行くかはわかりませんが、良い方向に行くためにも、戦争という痛ましいことがあったことを忘れないでいかなければ駄目なんだって私は思います。」(20 分 31 秒) と述べている。この発言は、戦争を受け入れた上で、地域や文化の変化は否定せず、より望ましい未来を目指すために努力をするという、主人公 1 の今後の行動を期待させる内容である。

このように主人公 1 には、樺太の知識を獲得し、興味や関心が芽生えたことで当事者性を獲得し、最後には今後の行動の予兆が見られるといった一連の変化があった。

3.3 受講生の態度変容

以上の調査の対象は受講生 1 人のみではあるが、その受講生の様子には明確な変化が現れた。また、調査は行っていないが、その他の 3 人の受講生についても、プロジェクト活動の中で様子に変化していったことを筆者は間近で観察している。

このとき、筆者は受講生らに態度変容が起きたのではないかと考えた。態度とは普段よく使う言葉であるが、研究者によって様々な定義が示されている。例えば、態度には好きか嫌いか、あるいは好意的か好意的でないかの連続によって、何かまたは誰かを評価する性質がある (Zimbardo・Leippe 1991 : 31)。

態度の構造理論の 1 つである態度の ABC モデルは、態度に「感情 (affect)」「行動

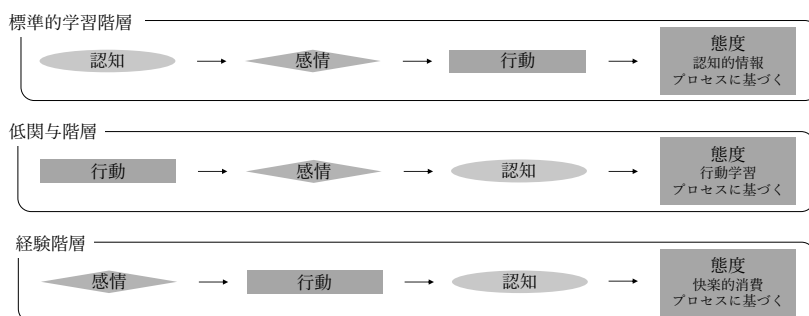


図 4 ソロモン (2015) の効果階層モデル¹¹⁾

(behavior)」「認知 (cognition)」の3つの構成要素があると主張する。消費行動学の専門家であるソロモンはそれぞれの要素に相関関係があるとし、消費者の構成要素がどのような順序で変化し態度が形成されるのか、効果階層モデルを示している (ソロモン 2015: 335-336)。樺太PJは学習から始めることから、認知から始まり行動に終わる「標準的学習階層」に当てはめられると考えられる (図4)。

筆者としても、受講者に現れた変化は、「樺太を知る」「樺太に興味や関心を持ち、対象への当事者性を獲得する」「具体的な行動の予兆が見られる」という一連の変化であり、それぞれ「認知」「感情」「行動」という順序を持った態度変容であるという立場をとりたい。

3.4 樺太プロジェクトの役割

「現代の若者編」の制作によって、樺太PJは受講生の態度変容を起こすことが示唆された。そのため、樺太PJには樺太の記憶を伝承するという本来の役割に加えて、受講生に態度変容を与えるという役割も与えることとした。その仮説を図5に示す。

まず、受講生は学習課題を受理し、樺太の一般的知識を獲得する。ここで受講生が獲得できるのは樺太に対する「認知」にとどまる。これは、これまでの教育機関等における学習活動でも到達できた段階である。樺太PJでは、その後の感情段階・行動段階の変化に注目する。受講生は樺太に関する調査や引揚者の対話などを継続することで、樺太と自らが暮らす地域の関係性を認識しつつ、自らが樺太の文脈に位置づけられていることを理解する。ここで受講生は樺太に価値随伴的な興味や関心を持ち、「感情」の段階へ移行し始める。さらに、樺太の記憶を伝承するための具体的作業である映像制作 (取材・撮影・構

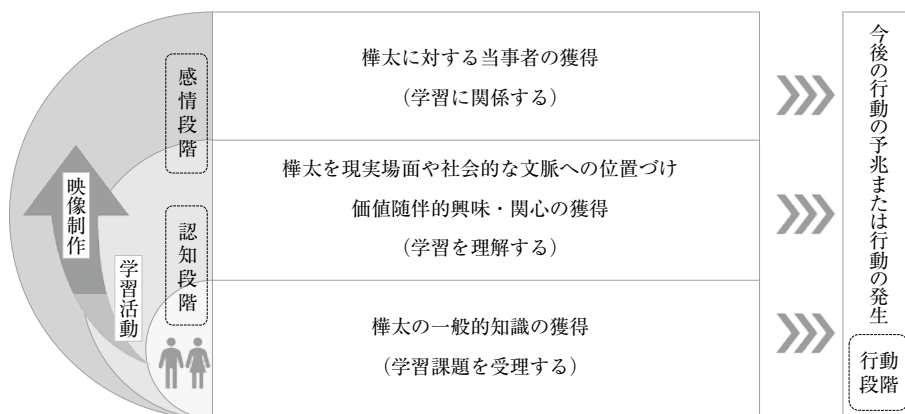


図5 樺太PJの活動による受講生の態度変容過程 (筆者作成)

成・編集・公開などの一連の作業)を行うことによって、学習課題に自ら関係し、当事者性を獲得することができる。最後に受講生はこれまでに得た樺太の「認知」や自らの「感情」を複合的に検討した結果、今後の「行動」の予兆が見える。これが受講生の態度変容過程である。

4. 樺太PJに関係した若者の態度変容

本章では、前章で示した仮説の検証を行う。

これまで樺太PJでは実施年ごとに4つの取り組みを行っている(表1)。2014年はプロジェクト化以前の取り組みであるが、活動内容はそれ以降の取り組みと同様であるため、便宜上、プロジェクト活動に含めることとした。4つの取り組みのうち、本章では3.1で調査した2020年と2021年の受講生を対象とし、樺太PJが与える態度変容を検討する。

なお、2017年の取り組みを除外する理由は、本稿の目的に合致しないと考えたためである。この年はすでに受講を終えた学生の協力を得て講義外で実施した。講義外であったことから学生に負担をかけることが憚られ、筆者が多くの作業をしたため、除外する。

表1 樺太PJのこれまでの取り組み

実施年	受講生数	証言者数	成果物	備考
① 2014年	4名	7名	現代の若者 編	・講義内で制作 ・取り組みの終了は2016年
② 2017年	5名	6名 ※うち4名は 引揚者関係者	樺太の概要 編 大鵬の引揚 編 九人の乙女 編 昭和の稚内 編	・講義外で制作 ・稚内市教育委員会の委託事業
③ 2020年	5名	3名 ※うち2名は 引揚者関係者	看護師の自決 編	・講義内で制作 ・稚内市教育委員会の委託事業
④ 2021年	4名	3名	戦後の混住 編	・講義内で制作

4.1 実験1「看護師の自決編」の制作

4.1.1 作品の制作

(1) 作品の目的(学習課題)

終戦直後の混乱の中、樺太では多くの悲しい事件が起きた。本作品で取り上げる看護師

集団自決事件（以下、自決事件）もその1つである。作品の制作のきっかけは、稚内市教育委員会より自決事件を紹介する映像の制作を委託をされたことである。

自決事件の要因を分析すると、受講生は現在の社会問題と共通する内容が多いことに気づいた。そのため、作品の目的（学習課題）は「視聴者が事件の要因と現在の問題を重ね合わせられるよう手引きし、その解決のために思考を巡らすきっかけを与えること」とした。

（2）制作の手順

制作者 作品制作は2020年の受講生5人が担当した。撮影や編集等の役割分担はせず、受講生全員がそれぞれ協力し作業することとした。筆者は映像制作の指導、取材交渉や制作工程の管理を行った。

制作工程 制作は2020年7月から開始した。まず、7月に樺太の歴史や自決事件に関する文献調査などの学習を始めた。次に、9月に引揚者や関係者の取材を始めた。ここで受講生たちは事件の複数の要因と現実問題の関連性に注目した。編集は2021年1月から行い、3月に完成した。作品は2021年4月から稚内市樺太記念館で展示上映している。

取材対象者 1人の引揚者、2人の関係者の証言をハイビジョン画質で収集した。

その他特記事項 作品に使用している一部の映像には過去に撮影したものが含まれる。また、この取り組みは北海道の民放テレビ局HBCの報道でも詳しく取り上げられた¹²⁾。

（3）作品の内容

成果物である作品のタイトルは「あの日、ニレの木の下で。」である（図6）¹³⁾。

「作品内のナレーションは手記を読み上げたものである」という説明文の表示から作品が始まる。ナレーションが入り、手記の執筆者の女性（以下、主人公2）が体験した逃避行の再現映像がインサートされる。暗転し「ああ、私は、生き残ってしまうのだ」という一文の表示及び読み上げがあった後、タイトルが表示される。

明転し、主人公2の次男が生前の主人公2の様子を語り始め、看護師という職業や出身が樺太北部の恵須取町太平炭鉱であることが明かされる。恵須取町出身の男性が登場して当時の様子、特に炭鉱業が盛んであったことを述べる。樺太の炭鉱業を紹介した8ミリフィルム映像が表示された後、現在の恵須取町（現ウグレゴルスク）の炭鉱の様子が映る。

主人公2の同僚女性が登場し、活気があった当時の太平炭鉱の様子を語る。さらに、豊かだった看護師生活の様子が手記とナレーションによって紹介される。そのような中、主人公2の次男により、終戦直後に主人公2や同僚女性を含む看護師23人が集団自決を図ったことが明かされる。暗転し、亡くなった看護師6人の写真が映し出される。

ナレーションや同僚女性の証言、再現VTRや雑観、当時の写真により、終戦から主人

公 2 らが自決をするまでの様子が、以下のような時系列で明かされる。下線部は主人公たちが自決をする決断に至ったと考えられる要因である。

- ・ 恵須取は停電等が起きており玉音放送が聞けず、住民は終戦の情報を知らなかった。
- ・ 終戦後もソ連軍は恵須取や太平炭鉱に攻撃を続けた。
- ・ 住民たちは避難を開始したが、患者を守るため、看護師たちは最後まで残った。
- ・ 周囲から孤立した看護師たちは、終戦日翌日の深夜、女性のみで避難を開始。
- ・ 恵須取は鉄路が未敷設であり、320km 先の最寄り駅まで歩いて逃げるほかなかった。
- ・ 逃がっている際、何度もソ連軍の戦闘機が上空を通り過ぎ、その度に絶望を味わった。
- ・ 避難中に出会った人々から「ソ連軍が包囲しているため逃げる場所がない、覚悟する必要がある」と誤った情報を得てしまったことで、看護師たちは自決を決意した。
- ・ 自決は政府の教えであり、逃げる際に青酸カリや睡眠薬を病院から持ち出していた。
- ・ 武道沢という場所の丘の上に立つ一本のニレの木の下を自決場所に決めた。
- ・ 薬品を服用し、各々手首を切った。同僚女性曰く、今でも時折、傷が疼くとのこと。
- ・ 婦長をはじめ、精神的な負担を持っていた者（責任者など）から亡くなっていった。
- ・ 看護師たちは死ぬために、時間が経って塞がった手首の傷を何度も穿って開いた。
- ・ 終戦日の翌々日の朝方、看護師たちは近隣で働く男性たちによって救助された。

終戦から 74 年後に開催された講演会の様子が映し出される。同僚女性が登壇し、当時の様子を淡々と語る。自決した同僚へ「そのうち、そちらに行きます」と一言添える。

主人公 2 は 67 歳まで助産師を続けた。主人公 2 の次男は、自らが生き残ってしまった責務を日本社会のために果たす必要があるという考えを持っていたのではないかと語る。

タイトルが再表示された後、暗転。その後、作品の逆再生が始まる。事件の要因と考えられる内容の証言（音声のみ）が入り、同時に以下のテロップが表示される。

- ・ 政府の教育方針（証言「辱めを受けるより死んだ方が……政府の教育を受けていた」）
- ・ 周囲からの孤立（証言「逃げ場がなく女性だけ。（自決も）仕方がなかったのかな」）
- ・ 脆弱な交通網（証言「恵須取は汽車もない。手を引かれてトボトボと歩いた」）
- ・ 情報伝達の甘さ（証言「住民で終戦を知っている人はほんのトップの人たちだけ」）

「これら 1 つ 1 つの要因は、私たちにとって一般的な問題ではないか」という一文が表



図 6 「あの日、ニレの木の下で」の一場面

示され、作品は終幕する。

4.1.2 調査と考察

(1) 方法と手続き

被験者 作品を制作した受講生5人を対象に2021年2月24日から3月4日までの期間でアンケート調査を行った。なお、本調査は3.1の調査と同じタイミングで行っている。

手続き 質問は講義内で筆者が提示し、回答は後日、Wordデータで提出させた。

内容 受講生に対し樺太PJの取り組みで獲得したと考えられる自らの変化や今後への影響について自由に記述させた。なお、自らに変化や影響がない場合は、その通り記述するよう申し添えた。

(2) 結果（受講生の回答）

受講生5名からはそれぞれ以下の回答が得られた。なお、下線や括弧部は筆者が追記したものであり、受講生の回答から、認知・感情・行動の各段階が変化すると判断した内容である。なお、受講生が「感じた」としていても、それが感情ではなく認知や行動に該当すると考えられるものは、そのように判断した。

A「自分が、戦争の心配をしなくていい時代に生まれてとても幸せだと感じました。敵が攻めてきて逃げ出し捕虜になったらどうしようや家族が戦争に出征し帰って来ないかもなどと考えることがない時代に生きて居られて本当によかった（感情）と思います。（中略）取材をする前に比べてより自分の今生きている瞬間をより大切にしたい（行動）と感じました。戦時中にたくさんの人が亡くなってその人たちみんなが生きたかった明日や未来を今の自分が生きているのだと実感した（感情）からです。」

B「この太平洋炭鉱の集団自決事件があまり知られていなかった理由の一つとして、本当につらい事件であったからこそ自分たちからは、あまり話したくなかったということがある。だからこそ、取材に協力してくれた方々に感謝をし、この悲しい事件があったこと、もう二度と起こしてはいけないという思いを伝えるため、頑張ることができた（行動）と感じた。」

C「惨劇が起きた原因は情報が正しく伝わらなかったからだと言っていたが情報を正しく伝えることはこれからの生活で気を付けなければならない（行動）ことである。様々な情報が行き来する世の中では些細な情報で世の中が混乱することがある。（中略）それが「本当に正しく伝わるのか？」「これは流すべき情報なのか？」ということを常に考えなければならない（行動）と感じた。」

D「感じたことは2点あります（感情）。1点目は戦争を体験した人にかかわってみて戦争はあっちゃいけないということ。2点目は見ている人にどう伝えればわかりやすくなるかということ。戦争を体験した人にインタビューをしているのを聞いてみてテレ

どこかで見るものとは違う雰囲気を感じました。(感情)」

E「樺太についての知識が増えたことはもちろん、それ以上に“戦争”を意識することが多くなった(感情)ように感じる。その中でも、知識の部分でいえば、“引揚者”という言葉の意味が授業初期に比べて、より深い意味を持つようになったと思う。そういう意味でも、今まではただ“綺麗な防波堤ドーム”として観ていたが、多くの歴史があそこにもあると思うと、違った目で見られるようになったように思う。稚内に関しても同様に、本州出身の私にとって、ただ最北のイメージしかなかったことも、過去を見ると壮絶な物語が隠れているのだなど、稚内自体の印象も大きく変わった。(感情)」

(3) 考察(受講生の変化)

5人の受講生の回答から、態度変容の各段階のうち、特に感情段階と行動段階の変化を順に見ていく。

事前調査において樺太に興味がなかったと回答していたAは樺太PJでの経験を振り返りつつ、現代に生きていられてよかったと述べている。樺太で起きた出来事を現実場面へと位置づけてきており、感情に変化があったとしてよいだろう。「取材をする前に比べてより自分の今生きている瞬間をより大切にしたい」と述べていることから、今後の行動の予兆が見える。

もともと樺太に興味や関心を持っていたBは引揚者への感謝によって記憶の伝承という困難な作業を乗り越えたと回答している。樺太PJで得た経験が原動力となり、行動を変化させることができたことがわかる。

同じく樺太に興味や関心を持っていたCは、事件の要因の1つ「情報伝達の甘さ」を取り上げ、現実の問題と関連づけている。また、情報の取り扱い方について「これからの生活で気を付けなければならない」「常に考えなければならない」と述べており、今後の行動の発生も期待できる。なお、これらの回答はメディアリテラシー教育にも通じるものがある。

Dは自身の感情の変化を2点あげている。しかし、この回答だけでは行動の変化に繋がったのかはわからない。なお、「見ている人にどう伝えればわかりやすくなるか」「テレビとかで見るものとは違う雰囲気を感じました」という回答は、Cと同様、メディアリテラシーに通じる。澤木らは映像制作活動によって開発される5つの能力を因子分析により明らかにしている(澤木・松野2009:80)。そのうち「制作者の視点」と「物事を客観的、批判的に読み解く能力」が既存のメディアリテラシーの定義に分類されるとしている。それに当てはめると、Cは「物事を客観的、批判的に読み解く能力」、Dは「制作者の視点」を獲得したと考えられる。

Eは「戦争を意識することが多くなった」「稚内自体の印象も大きく変わった」と述べていることから、感情の変化が起きていることがわかる。一方、回答では今後の行動に言及していない。

全員の回答を俯瞰してみると、感情段階の変化と見られる内容はA、D、Eが言及している。B、Cはその言及をしていないが、受講前から樺太に興味や関心を持っていたことから、すでに感情段階はクリアしていたと判断できる。次に行動段階の変化だが、A、B、Cの回答内容には今後の行動への言及があった一方、D、Eの回答にはそれがなかった。その理由の1つとして、D・Eは市外出身者であることが影響しているのではないかと考えている。稚内出身のA、B、Cとは異なり、市外出身であることから樺太に関して当事者性を獲得しにくく、感情段階から行動段階への接続がしにくかったのではないだろうか。

また、受講生の回答には統一感がなく、それぞれ異なった変化を述べていることも特徴である。特に、作品の目的である「事件の要因と現在の問題を重ね合わせ、その解決のために思考を巡らすこと」を実践できたことがわかる回答をしているのはCのみである。

以上のような結果となったが、筆者はこの実験だけでは受講生に態度変容があったかどうか結論づけることは尚早であると考え、次年も継続して実験することとした。

4.2 実験2「戦後の混住編」の制作

4.2.1 作品の制作

(1) 作品の目的（学習課題）

終戦から日本人が引き揚げるまでの数年間の樺太では、日本人とソ連人が一つ屋根の下で暮らす「混住」を行い、ときには争い、ときには助け合って生活を営んでいた。その混住を題材とした演劇が稚内市で公演されることとなり、稚内市教育委員会からその講演の記録撮影を依頼されたことが、作品制作のきっかけである。

混住時代の樺太では日本統治からソ連統治へ移るナショナルな変化と、異なる人種間の心が通じ合うローカルな変化という相反する2つの変化が起きていたことが特徴である。

そのため、作品の目的（学習課題）は「2つの変化を対比し、視聴者にナショナリズムへと進みつつある現在の国際社会を見つめ直すきっかけを与えること」とした。

(2) 制作の手順

制作者 作品制作は2021年の受講生4人が担当した。撮影役と編集役として、それぞれ2名ずつをあてたが、その他は協力して作業することとした。筆者は映像制作の指導、取材交渉や制作工程の管理を行った。

制作工程 制作は2021年7月から開始した。まず、7月から樺太の歴史や混住に関す

る学習を開始した。次に、8月から引揚者や関係者の証言の収集を始めた。12月に物語構成を検討し始め、編集は2022年1月から始めた。制作中は、相反する2つの変化のうち、特にローカルな変化をどう描くかを重視して活動した。作品は3月に完成し、4月から育英館大学公式YouTubeチャンネルで公開している。

取材対象者 3人の引揚者の証言をハイビジョン画質で収集した。

その他特記事項 作品に使用している一部の映像には過去に撮影したものが含まれる。また、この取り組みは読売新聞や北海道新聞の報道でも取り上げられた¹⁴⁾、¹⁵⁾。

(3) 作品の内容

成果物である作品のタイトルは「わが家にソ連人がやってきた」である(図7)¹⁶⁾。

作品はSNS上で見受けられる外国人への差別的発言から始まる。場面が転換し、演劇の様子が映し出され、登場人物が「よくわからないものは怖いでしょう。少しずつ知っていけば大丈夫」と論ず。タイトルがインサートし、暗転する。

樺太の当時の映像や写真とともに、終戦前後のソ連軍の侵攻の様子や戦後にソ連人が日本人住宅へ上がり込み、一緒に生活をした「混住」の経緯が紹介される。戦後75年に稚内市で講演された混住をテーマとする演劇の様子が映る。その演劇はこの作品の主人公である男性(以下、主人公3)の手記を元としている。主人公3は手記を書いた理由を「(高齢により)記憶が妄想となる前に伝えたかった」ためと語る。

演劇が始まり、ステージ上に日本人とソ連人の女性が現れる。日本人女性とソ連人女性とがお互いに身振り手振りでコミュニケーションを取る。このように樺太でソ連人と混住した経験を持つ日本人は多くいる。終戦直後に父親を樺太に残し、稚内に引き揚げた女性のインタビューが入る。女性は父親が残された理由として、機械に詳しく、その技術をソ連人に引き継ぐためだったと述べる。一方、女性の父親は過酷な労働も強いられた。逃げ出した同僚が射殺された様子も目撃している。その辛い経験から、女性の父親は当時のことをほとんど語らなかったという。そのため、女性は現在のロシアに対しても良い印象を抱いていない。演劇でソ連人女性を演じたロシア人女性は日常生活においても引揚者を傷つけずにコミュニケーションを取ることに悩んでいると苦しそうな表情で述べる。

演劇の場面に戻り、ソ連人女性の過去が語られる。そのモデルとなった主人公3と混住したソ連人女性は、ナチスドイツの空爆で5人の子供を亡くしていた。そのため主人公3を自分の子供のように可愛がってくれたという。劇団長のインタビューが入り、お互いが戦争で傷ついたため助け合う事情が生まれたのではないかと話す。演劇でも日本人とソ連人が助け合う様子が描かれる。主人公3は当時希少な砂糖をソ連人女性から譲ってもらい餡子にして食べたことと笑顔で語る。ロシア人女性は当時の日本人とソ連人が混住しながらお互いの文化を理解し合ったのではないかと述べる。



図7 「わが家にソ連人がやってきた」の一場面

演劇は日本人の引き揚げの場面に入る。日本人家族がソ連人女性にダスビダーニャとロシア語で別れの挨拶をする。ロシア人女性は「樺太の歴史を大切に受け止めていきたい」とインタビューに答える。父親を樺太に残した女性は、父親と再会したとき、父親の足に抱きついたことを鮮明に覚えているという。そして「日本人もソ連人も同じ人間、話し合って悲しまないようにしないといけない」と語る。

現在、主人公3は札幌市で設計事務所を営んでいる。主人公3は「ロシアという国には別な意見はあるが、一人の人間であるロシア人には懐かしさと親しみやすさを持つ」という。稚内市では市内の高校生とサハリンの高校生のオンライン交流会が開かれた。交流会を終え、市内の高校生は「政治は別として、人同士は良い関係のままがいい」と述べる。

暗転し、エンドロールが流れる。エンドロールが終わり、ロシアのウクライナ侵攻の様子や破壊された街で悲しみに暮れるウクライナ女性が映し出される。「今こそ、人と人の関係性が試されているのかもしれない」とテロップが表示され、終幕する。

4.2.2 調査と考察

(1) 方法と手続き

被験者 作品を制作した受講生4人を対象に2022年3月12日から4月30日までの期間でアンケート調査を行った。なお、本調査は3.1の調査と同じタイミングで行っている。

手続き 質問は講義内で筆者が提示し、回答は後日、Wordデータで提出させた。

内容 受講生に対し樺太PJの取り組みで獲得したと考えられる自らの変化や今後への影響について自由に記述させた。なお、自らに変化や影響がない場合は、その通り記述するよう申し添えた。

(2) 結果（受講生の回答）

受講生4人からはそれぞれ以下の回答が得られた。なお、下線と括弧部は筆者追記。

F「取材などを通して混住の話を深く聞くことで、今回のテーマともいえる「国同士の関わりではない“人同士の関わり”」を感じる事が大いにできた（感情）と思います。（中略）自分個人としても、取材や演劇の話を通して感じた、初対面の人に対して偏見を持たず柔軟な心で多くの人と接することをやっていきたい（行動）と思いました。」

G「樺太の人、ロシア人そして日本人は一人ひとり手を取り合って生きているのを見ると、生まれた国の違いで人の性格が決まるわけではないと思いました。本当に異国人ってだけで悪と決めつけるのは決していいことではないと再び気づかされました。やはりみんな同じ人間なんだと再確認できた（感情）ことは、この講義を受けてよかったポイントだと感じています。（中略）私はこの講義で聞いた話を思い出して、人を差別することは絶対にしないと心から思いました。（行動）樺太人でもロシア人でもウェルカムです。」

H「引き揚げた方達へインタビューをし、実際の話を聞いているうちに遠い昔の歴史ではないと感じ、また稚内市にも少し関わりがあり身近な歴史に感じるようになった。授業では習わなかった部分まで理解が深まっていくうちに以前ほど無関心では無くなっていった。（感情）（中略）混住していた時代のことを学ぶ中で育ってきた環境や国籍が違っていても、言葉が通じなくても助け合って生活していけるのだと知れた（認知）からである。今後は授業で学んだことを人との関わる際に思い出して生活していこう（行動）と考えた。」

I「ロシア人にも悪い人ばかりではなく、むしろ戦争によって傷ついた人たちもいるということを改めて知り、相手も我々と同じ人間であり、お互いに積極的に接することで親交を深め、お互いを理解し合えるんじゃないかとわたしは感じました。（感情）今まで私はロシアという国に対する思いからロシア人に偏見を持っていましたが、今回の経験を通して、国としてのロシアの見方は今の情勢的に難しい状況ではありますが、ロシア人だけでなく他の国々の人への接し方というのは、もっと積極的に、お互いを尊重し交流できるよう努力していこう（行動）と思いました。」

(3) 考察（受講生の変化）

4人の受講生の回答から、態度変容の各段階のうち、特に感情段階と行動段階の変化を順にみていく。

Fは人同士の関わりを感じることができた（感情）とし、今後も偏見を持たず人と接したい（行動）としている。Gは外国人であっても同じ人間だということを再確認できた（感情）とし、差別は決してしない（行動）との決意を述べている。Hも助け合って生活していた混住を思い出しながら生活したい（行動）と述べている。さらに、樺太に無関心ではなくなった（感情）と記述もしている。この年の受講生の中で唯一の市外出身であり樺太に興味や関心を持っていたIも、自らが持つ偏見を認めた上で、市内出身の3人と同様に外国人と接する際に相手を尊重して交流していきたい（行動）としている。

このように、いずれの受講生も感情が変化したことや今後の行動を予期させる記述をしており、認知・感情・行動の各段階の変化がスムーズに接続されていることがわかる。こ

のことから、筆者が設定した仮説どおり、受講生らに態度変容が起こったことがわかった。

また、受講生の回答を見ると、感情段階に分類できるものとして「“人同士の関わり”を感じた」「同じ人間だと再確認できた」「理解し合えると感じた」など、行動段階に分類できるとして「偏見を持たず人と接することを行っていききたい」「人を差別することは絶対にしない」「人と関わる際に思い出して生活していこう」「お互いを尊重し交流できるよう努力していこう」など、概ね統一された内容の記述が見られる。そして、これは作品の目的である「ナショナリズムへと進みつつある現在の国際社会を見つめ直す」こと、そのものである。これは受講生によって回答内容が異なっていた2020年の調査とは大きく異なる点である。

このように実験2においては、樺太PJに参加した受講生に認知・感情・行動の各段階に変化が明らかに起きている。実験1の結果と合わせ、樺太PJは受講生に態度変容を与える可能性が高いと判断して良いだろう。

5. ま と め

本稿では樺太PJに参加した大学生の態度変容を検討した。まず、樺太の歴史や稚内市との深い関係性を整理した。その上で、地域に暮らす若者である受講生が樺太の知識や興味・関心をどの程度持っているのか確認した。次に、プロジェクト活動の前段階で制作した樺太に関連する映像作品を対象とし、作品内の受講生の行動や発言を観察した結果、一連の活動によって受講生に態度変容を与えることが示唆された。そして、先行研究を参照し、仮説として受講生の態度変容過程を設定した。その検証を行うため、2020年と2021年の2カ年のプロジェクトを取り上げ、参加した受講生にアンケート調査を実施した。

本稿でわかったことは2つある。

1つ目に、樺太PJに参加した受講生の多くに態度変容が起きたことである。それは仮説で設定したとおり認知・感情・行動の各段階が順序立てて接続されたものであった。受講生に態度変容が起きた理由の1つとして、樺太PJにおいてその活動の中でも大きな割合を占める映像制作が関係していると考えられる。樺太PJの活動においては引揚者の証言を映像で記録するためにインタビューを行う。インタビューでは引揚者が記憶の断片を受講生に語りかけるが、それと同時に受講生はその記憶の断片を詳らかにするために問いかける。これは双方向の情報のやりとり、つまり対話でもある。さらに、受講生は記録した引揚者の証言をドキュメンタリー作品として再構築するために何度も証言を視聴し直す。同時に、作品の目的を達成するためには自らの考えや引揚者の思いをどのように構築

していけば良いのか、議論をしながら整理しなければならない。作品内容が視聴者に適切に伝わるよう、ナレーションやテロップとして適切な言葉を添えることも必要だ。このように、受講生は作品としてアウトプットするため、引揚者から得た情報を何度もインプットし直すこととなる。作品が完成するまでの一連の作業は困難を極めるが、それを徐々に乗り越えていくことで、受講生は樺太と密接に関わっているという自覚を持つことができる。それはこれまで行われてきた平和学習と異なる点である。樺太PJが持つこのような性質が、受講生に対し、認知の獲得にとどまらず、態度や行動をも変化させることに作用しているのではないかと考えている。

2つ目に、樺太PJが与えた受講生の態度変容の内容についてである。実験2ではいずれの受講生の回答も人間の多様性や交流を重んじる内容に統一されており、その内容は作品の目的とも整合していた。一方、実験1では受講生ごとに回答内容が異なっており、作品の目的と整合している回答は一部のみであった。この違いは、作品の目的、つまり学習課題を考察した時間や密度の差であると考えている。まず、実験1で取り上げた作品の目的は、「政府の教育方針」「周囲からの孤立」「脆弱な交通網」「情報伝達の甘さ」などの自決事件の要因と現在の問題を視聴者が重ね合わせられるよう手引きをすることであった。それぞれの要因は、それ自体が1つの作品として成立するほど奥深い内容でもある。しかし、大学の講義内という限られた時間の中ではそれらの要因を総花的に取り上げることにとどまり、解決策やあるべき姿の提案など、それぞれの要因をより深い領域まで考察することができなかった。また、映画のような長編作品ならともかく、大学生が現実的に制作できる範囲の短編作品では、全ての要因を取り上げるためには1つ1つの密度を低くするしかないことも影響している。結果、考察の時間や程度が十分ではなかったといえる。次に、実験2で取り上げた作品の目的は、相反する2つの変化を対比し、視聴者に現在の国際社会を見つめ直すきっかけを与えることである。作品の目的を達成するためには、取り上げた2つの対比のうち異なる人種間の心が通じ合うローカルな変化をどのように描くかが焦点であった。そのため、1年間、その1点だけを重点的に考察することとなった。結果、実験2の受講生は実験1の受講生よりも、学習課題に対して時間が長かつ密度の大きい考察ができた。また、価値随伴的な興味を持たせるには学習課題を現実場面や社会的な文脈に位置づけることが必要だが、実験2の期間に開催された東京・北京オリンピックなどにより人間の多様性を感じる機会が多かったこと、米国や英国など先進国のナショナリズムの高まりや中国やロシアの覇権主義的な動きが活発になってきていることなど、直近の国際情勢と関連づけができたことも、より深い考察を促した理由なのではないかと考えている。

以上のことから、本稿では樺太PJが受講生に態度変容を与えたと結論づけるが、その

態度変容の内容や程度は受講生によって様々であった。特に実験1と2では結果に違いが現れた。本稿では生データの参照にとどまったが、今後はサンプル数を増やしてより詳しい分析を行う必要がある。そうすることで、態度変容の効率性を高めることにもなる。いずれにしても、樺太PJのような活動は効果的な平和学習の形態となることが期待できるだろう。

また、本稿で触れることはできなかったが、作品自体の評価も必要である。作品は視聴者に対し、その目的を果たすことができたのか、つまり視聴者の態度変容の有無や程度も調査しなければならない。一方、評価軸は異なるが、樺太PJで制作した作品は「地方の時代」映像祭や全映協グランプリ、全国自作視聴覚教材コンクール、映文連アワード、東京ビデオフェスティバルなど国内の映像コンテスト等で多数表彰されていることから、一定のクオリティは保たれていると考えている。

さらに、こちらあまり触れられなかったが、引揚者の証言を記録・保存できたことも樺太PJの大きな成果である。実際、取材から数年が経った現在、証言していただいた引揚者の中には他界された方や、高齢により一切の取材を受けられなくなった方もいる。引揚者の一部の記憶を豊かな表情や肉声とともに記録したデータは、大いに重要な財産となった。

最後に、樺太PJの活動を現在まで継続できた大きな理由は、多くの関係者の皆さんのお力添えがあったためと考えている。引揚者の皆さんや2021年に解散した一般社団法人全国樺太連盟、活動のフィールドを与えていただいた稚内市教育委員会や育英館大学、そしてプロジェクトに参加してくれた受講生、助言いただいた恩師など、関係していただいた全ての皆さんに感謝の意を表し、本稿を締めくくりたい。

注

- 1) 例えば、樺太の歴史を語り継ぐことを目的として引揚者で構成される一般社団法人樺太連盟の「樺連情報第740号（2011年12月1日発行）」によると、同連盟は2010年6月25日に開催した第62回通常総会において、7年～10年以内に解散することに決定したとしている。同連盟は2021年3月に解散しているが、その理由は会員の高齢化や減少である（産経新聞「全国樺太連盟、活動に終止符 歴史の継承願う」、<https://www.sankei.com/article/20210813-BR67L3UV3NJUVJYI5VFSXHHUVY/>, (2023年1月8日取得))。
- 2) 上・下巻、中村融訳、岩波書店など。
- 3) 野田サトル『ゴールデンカムイ』の樺太編は14巻後半から22巻前半までに掲載。
- 4) 樺太の平穏な日々については、複数の引揚者の証言や手記が残っている。例えば、小島など（小島コナ（1976）「落合までは逃げられたものの」創価学会青年部反戦出版委員会編著『北海を渡って―樺太引揚げ者の記録―』、第三文明社、95-99頁）。
- 5) 稚内市「稚内市統計書」、<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/shisei/tokei/tokeisyo/>, (2023年1月8日取得)。

- 6) 稚内プレス「藤建設が無償で記念碑補修 稚泊航路への縁もあって」, <https://wakkanaiexpress.com/2019/12/04/42651>, (2023年1月8日取得).
- 7) 稚内観光情報「望郷の樺太の碑」, <https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/kanko/midokoro/spot/boukyoukarahuto.html>, (2023年1月8日取得).
- 8) 2021年の樺太PJにおいて、引揚者から証言を収集・記録している。
- 9) 2014年の樺太PJにおいて、引揚者から証言を収集・記録している。
- 10) 育英館大学 YouTube「私たちは、【カラフト】を知らない」, <https://www.youtube.com/watch?v=2W2qr6zWDuA>, (2023年1月8日取得).
- 11) ソロモンをもとに筆者作成 (ソロモン 2015: 335-336).
- 12) HBC ニュース 北海道放送 YouTube「HBC 特集・戦後 77 年 旧樺太の悲劇 終戦 2 日後、なぜ看護師たちは集団自決をしたのか 若者たちが考える理由」, https://www.youtube.com/watch?v=yLKa5N_g9qo, (2023年1月8日取得).
- 13) 「あの日、ニレの木の下で」は稚内市樺太記念館で展示上映されている。
- 14) 読売新聞 (2022年8月21日)「日ソ混住の時代映像に」。
- 15) 北海道新聞 (2022年12月14日)「樺太引き揚げ者の思い、丁寧に 育英館大制作映像 3 コンテスト入賞」, <https://www.hokkaido-np.co.jp/article/775011/>, (2023年1月8日取得).
- 16) 育英館大学 YouTube「わが家にソ連人がやってきた」, <https://www.youtube.com/watch?v=rBdUh00ktkc>, (2023年1月8日取得).

参考文献

- 天野尚樹 (2017)「序章 樺太の地理と人々」原輝之・天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史—四〇万人の故郷—』岩波書店, 1-42 頁。
- 大鵬幸喜 (2001)『巨人, 大鵬, 卵焼き』日本経済新聞社。
- 澤木香織・松野良一 (2009)「映像制作活動によって開発される能力に関する研究—KJ 法と因子分析法を用いて」『総合政策研究』中央大学出版部, 第 17 号, 69-81 頁。
- 田中瑛津子・市川伸一 (2017)「学習・教育場面における興味の深化をどう捉えるか—鼎様相モデルによる諸研究の分析と統合—」『心理学評論』心理学評論刊行会, 第 60 巻第 3 号, 203-215 頁。
- ミシェル R. ソロモン (2015)『ソロモン消費者行動論ハードカバー版』松井剛監訳, 丸善出版。
- 水島久光 (2020)『戦争をいかに語り継ぐか「映像」と「証言」から考える戦後史』NHK 出版。
- 稚内市史編さん委員会 (1999)『稚内市史第二巻』稚内市。
- Zimbardo, P. G., & Leippe, M. R. (1991) *The psychology of attitude change and social influence*, McGraw-Hill.